

論 文

李頎の士人描写詩について (四)

A Study of Li Qi's Poems Representing High Tang Literati Part IV

山口 寧宏*

Yoshiharu KAWAGUCHI

Abstract

The purpose of this article is to research Li Qi's literature, especially to understand the features of his poems representing High Tang Literati. This article is divided into 4 parts.

Part IV endeavors to clarify the features of Li Qi's poems representing High Tang Literati and himself.

In the first section, this paper researched Li Qi's poems representing the most famous person amongst his friends, that is, Gao Shi. In the poems representing Gao Shi, some facts can be found from other historical sources. And these poems contribute to clarify the picture of the mode of High Tang Literati life.

In the second section, this paper explored Li Qi's poems representing unfortunate literati. They struggled hard and had a wealth of talent, but they were unhappy. Li Qi was also suffering misfortunes. So he was able to empathize with other unfortunate literati. I presume the purpose for Li Qi to describe them was that, if he had not done so, their existence and fame might not have been passed down or become more widespread. This mindset seems to have been inspired by Sima Qian who tried to resolve his misfortunes by writing *Shi Ji*.

In the last section, this paper researched Li Qi's self-representing poems.

Compared with his poems representing other poets, these contain fewer specific and concrete details. But his Yue-fu based on his own life experience is very interesting like Du Fu's self-representing poems.

In summary, Li Qi's poems representing High Tang Literati are the most distinctive feature of his literature. This feature shows that Li Qi had an explicit role as a documentary writer, and his poems are thought of as the best attainment in the history of verse from Xian-Qin to High Tang that can be rated on a par with Du Fu.

【キーワード】李頎、盛唐詩、士人描写

本論は、前稿⁽¹⁾に続く、李頎の士人描写にかかる作品に関する考察である。節の番号は前稿の続きとし、注番号は新たに振り直す。

(六)

前稿においては、杜甫の士人描写詩を考察し、次に本論の核心である李頎の士人描写詩の特徴について分析を行なった。李頎詩については、描写対象者の経歴、人となり、交遊など、士人としての生態が詳細に観察され、あたかもその人物の伝記、物語、エピソードを読むかのように、おもしろく記録されていることを確認した。そしてそれは、李頎の記録者としての自覚的な作詩営為であったと考えられる。

本稿においても引き続き李頎の士人描写詩を考察する。本節では、李頎と交遊を持った士人のうちもっとも著名なひとりである高適へ贈った作品を検討する。「贈別高三十五」(卷一三二)⁽²⁾を掲げる。

- 01 五十無産業 五十にして産業無く
- 02 心軽百萬資 心は百万の資を軽んず

*山口県立大学国際文化学部

Faculty of Intercultural Studies, Yamaguchi Prefectural University

03 屠酤亦與羣	屠酤も亦た与に群れ
04 不問君是誰	君が是れ誰なるかを問わず
05 飲酒或垂釣	酒を飲み或いは釣を垂れ
06 狂歌兼詠詩	狂い歌い兼た詩を詠ず
07 焉知漢高士	焉んぞ知らん 漢の高士を
08 莫識越鴟夷	識る莫し 越の鴟夷を
09 寄跡棲霞山	跡を寄す 棲霞山
10 蓬頭睢水湄	蓬頭 睢水の湄
11 忽然辟命下	忽然として辟命下り
12 衆謂趨丹墀	衆は謂う 丹墀に趨ると
13 沐浴著賜衣	沐浴して衣を賜わり
14 西來馬行遲	西來 馬行遅し
15 能令相府重	能く相府をして重ぜしめ
16 且有函關期	且つ函関の期有り
17 僂俛從寸祿	僂俛 寸祿に従い
18 舊遊梁宋時	旧遊 梁宋の時
19 皤皤邑中叟	皤皤たり 邑中の叟
20 相候鬢如絲	相候すれば 鬢絲の如し
21 官舍柳林靜	官舎は柳林静かにして
22 河梁杏葉滋	河梁は杏葉滋し
23 摘芳雲景晏	芳を摘みて 雲景晏し
24 把手秋蟬悲	手を把りて 秋蟬悲し
25 小縣情未愜	小県 情未だ愜わざれども
26 折腰君莫辭	折腰 君辞する莫かれ
27 吾觀聖人意	吾 聖人の意を觀るに
28 不久召京師	久しからずして京師に召かれん

本詩を解説する前に、簡単に高適の本詩制作までの略歴を述べる。武則天の長安元年（七〇一）に生まれた高適は、宋州宋城県を中心に梁宋（河南省東部、開封市から商丘市にかけてのあたり）において布衣の生活をおくり、途中、燕趙（河北省から山西省、遼寧省にまたがる地域）へ旅遊、河南省の淇水のほとりの別業での生活を経て、天宝八載（七四九）に睢陽郡（宋州）太守の張九皋の推薦によって制科の一つである有道科に挙げられ、同年、陳留郡（汴州）封丘県（河南省封丘県）尉の官職を得る。高適、四十九歳にての初めての任官であった。この間に、杜甫や李白などと交遊を持っている。³⁾

ここで、高適関連の論著を含めて以下のものが、この李頎詩に言及している。傅璇琮『李頎考』（『唐代詩人叢考』所収）、周勛初『高適年譜』、譚優学『李頎行年考』・『高適行年考』（『唐詩人行年考』所収）、劉開揚『高適詩集編年箋註』、劉宝和『李頎詩評注』、顧農等『高適岑參集』、羅琴・胡嗣坤『李頎及其詩歌研究』⁴⁾。

また高適には、洛陽から封丘県に赴く直前の作品として「留別鄭三章九兼洛下諸公」（卷二二三）があり、次の如くである。「憶昨相逢論久要、顧君晒我輕常調。羈旅雖同白社遊、詩書已作青雲料。蹇質蹉跎竟不成、年過四十尚躬耕。長歌達者杯中物、大笑前人身後名。幸逢明盛多招隱、高山大澤徵求盡。此時亦得辭漁樵、青袍裹身荷聖朝。犁牛鈞竿不復見、縣人邑吏來相邀。遠路鳴蟬秋興發、華堂美酒離憂銷。不知何日更攜手、應念茲晨去折腰」。この作品自体が高適の自述詩として興味深い、ここでは検討を省く。

さて李頎詩の制作時期について、周勛初『年譜』は、高適の封丘県尉赴任後の作とする。譚優学『李頎行年考』・劉宝和『評注』は、高適の「留別」詩が李頎詩に答えた作品であるとす。羅琴・胡嗣坤『研究』は、李頎詩は高適の封丘県尉赴任を送る作であるとし、また高適「留別」詩に言及し、李頎詩が洛陽の作である可能性を示唆する。周氏以外は、おそらくは、李頎詩の詩題「贈別」と高適「留別」詩の存在や詩題の呼応、また高適詩末句の「應念茲晨去折腰」と李頎詩第二六句の「折腰君莫辭」の措辞の関連性にとられすぎたのであろう、李頎詩の制作時期の判断を誤っていると思しい。後にも述べるが、李頎詩の後半には、封丘県尉就任後の高適の詩作が反映されており、この詩は、李頎が封丘県尉となった高適を訪ね、高適のもとを離れるときに贈った留別詩であると解すると、解釈に無理がなくなるのである。この作品は、高適の布衣の時代から有道科に挙げられ封丘県尉に就任し勤務するまでを、個別・具体的な記録として描写しているのである。

第一句目「五十無産業」は、前稿にも見られた、相手にとって不快である、触れて欲しくないと、思われる、経歴から歌い出す態度に通ずる。「五十歳にもなるのに、産業に従事していない」のは、下旬に高適が富貴を重んじないからだ

と理由が述べられるが、当時、その多くが地主階層出身者であった士人にとつて一定の「産業（地主としての土地経営）」を持つことはあるべき姿であつたらうから、手厳しい生活実態の指摘である。もちろん今は官僚となりそこからは抜け出したという称賛も裏には込められていよう。

ところで、『舊唐書』卷一一一・高適列傳に「適少濩落、不事生業、家貧、客於梁、宋、以求丐取給。天寶中、海内事干進者注意文詞。適年過五十、始留意詩什、數年之間、體格漸變、以氣質自高、每吟一篇、已爲好事者稱誦。宋州刺史張九皋深奇之、薦舉有道科。」「新唐書」卷一四三・高適列傳に「高適字達夫、滄州渤海人。少落魄、不治生事。客梁、宋間、宋州刺史張九皋奇之、舉有道科中第、調封丘尉、不得志、去。……年五十始爲詩、即工、以氣質自高。每一篇已、好事者輒傳布。」とある。高適の詩作の腕前が五十歳を過ぎて急激に上達した、あるいは五十歳で詩を初めて作つたと伝える。これらは事実とは異なるが、それを「五十」歳とする根拠の文献を論者は未だ見出しておらず、李頎詩の「五十」が指摘する内容は異なるが、「五十」を節目とする記述の淵源は李頎詩に求めうる可能性があるとも考える。史料の逸失や事跡伝承の錯綜などにより、李頎詩の「五十」歳と高適の詩文開眼の挿話（この淵源も未詳）とが結びついたのかもしれない。ともあれ、現存する史料としては、兩

『唐書』の「五十」歳の根拠として李頎詩が有力であると考ええる。

次に、第三句以下第十句まで、布衣の期間の放蕩で脱俗的な生活が描写される。第三・四句の遊俠的な交わりは、高適との談論のほか、高適から示された遊俠少年を描いた「邯鄲少年行」（卷二二三）や次の「贈任華」などを承けて、描かれたものであろう。

丈夫結交須結貧	丈夫の交わりを結ぶは	須く貧と結ぶべし
貧者結交始親	貧者と交わりを結びて	交わり始めて親し
世人不解結交者	世人の結交を解せざる者は	
唯重黃金不重人	唯だ黄金を重んじて人を重んぜず	
黃金雖多有盡時	黄金は多しと雖も尽くる時有り	
結交一成無竭期	結交は一たび成らば竭くる期無し	
君不見管仲與鮑叔	君見ずや 管仲と鮑叔と	
至今留名名不移	今に至るも名を留めて 名の移らざるを	

この高適詩に歌うようにまさに彼の交遊は「不問君是誰」ものであつただらう。

う。

第九句の「棲霞山」は、下句の「睢水の涓」との対から考えて「霞山に棲む」とは訓まず、「棲霞の山」すなわち「棲霞山」という地名であろう。山東省の単父県にあった山であり、『元豊九域志』卷二・京西路「上、單州、碭郡、團練。……縣四。……望、單父。五郷、有棲霞山。」と見え、また李白「送族弟單父主簿凝攝宋城主簿至郭南月橋卻迴棲霞山留飲贈之」（卷一七六）「賢豪相追餞、却到棲霞山。」がある。なお高適がこの山に隠棲したことを示す文献は、李頎のこの詩以外には見当たらず、高適の事跡を探索する貴重な史料となる。下句の「睢水」は、高適が長らく暮らしていた宋城県付近を流れていた河川。両句とも、高適の生活の事跡を地名によって個別・具体的に伝えている。

第十一句以下六句は、高適が有道科に及第し封丘県尉を授けられたことを描く。第十一句に「忽然辟命下」とあるから、それは本人や周囲の予想に反した突然のことであつただらう。下句「衆謂趨丹墀」は、周囲は制科受験の結果高適が士間が朱で塗り込まれた天子の宮殿を小走りする、つまり中央政府における官職を得ると期待していたことを言う。ただこの句は、高適の自負の強さに取材したものであるとも思われる。つまり高適自身は中央官僚就任を強く期待していたが実際はそうではなかった。そのことは本詩の末尾四句や後に掲げる高適詩からも伺える。第十三・十四句「沐浴著賜衣、西來馬行遲。」は比較的細かい描写であり、おもしろい。上句は、制科合格者の高適に、官服を支給したことをいう（それまでは処士として「麻衣」を着ていた）の⁷に加えて、その前に「沐浴」したことを描く。これは従来の詩歌にあつては極めて稀な描写ではなからうか。下句は、高適が都から任地の封丘県へと西からやってくるのに、慌てず焦らず、馬をゆっくり進める落ち着いた態度（あるいは期待はずれの官職であつたために任地への歩みが遅かつた様子）を描くのである。次の二句「能令相府重、且有函關期。」は、いずれは、高適が宰相から重んぜられて高位を得、都から函谷関を出て都に帰って来るといふ期待が人々にあるという意味であろうか。以上六句、高適の期待とは落差の大きな任官であつたことを伝えている。

第十七句以下六句は、高適の封丘県尉としての現状を描く。「僂俛従寸祿、舊遊梁宋時。」は、上句は、わずかばかりの俸禄つまり県尉という期待にそぐわない低い官職でも努力したまえという、李頎の高適に対する励まし。下句は、

かつて李頎と高適が一緒に梁宋の地に遊んだ時を懐旧するか。それならば高適の現状は、その時に布衣であったよりもましなのだというふうな意味であろうか。なお現存する史料には李頎と高適の梁宋の遊は伝えられていない。次の二句「曙瞻邑中叟、相候髮如絲。」は、李頎が封丘県尉の高適を訪ねたことを言う。「邑中叟」を高適であるとする注釈は論者が確認した限りでは見当たらない。ちなみにこの句が、本詩の系年をわかりにくくしている原因のひとつであると論者は考えている。

第二十三句以下は、李頎の高適への留別の言葉。末二句の激励の言葉の前に置かれた二句「小縣情未愜、折腰君莫辭。」は興味深い。この句の表現は、上述のように前掲の高適「留別」詩とともに、明らかに高適の封丘県尉時代の作「封丘作」（卷二一四）、「封丘作（一作縣）」（卷二一三）に依拠しているからである。前者には、

州縣才難適 州県は才の適い難ければ
雲山道欲窮 雲山に道を窮めんと欲す
揣摩慙點吏 揣摩 點吏に慙じ
棲隱謝愚公 棲隱 愚公に謝す
とあり、後者には、

乍可狂歌草澤中 乍る草沢の中に狂歌すべきも
寧堪作吏風塵下 寧ぞ風塵の下に吏と作るに堪えんや
祇言小邑無所爲 祇だ小邑は為す所無しと言えども
公門百事皆有期 公門は百事に皆期有り
拜迎官長心欲碎 官長を拜迎して心碎けんと欲し
鞭撻黎庶令人悲 黎庶を鞭撻して人をして悲しましむ
とある。李頎詩の「小縣情未愜」は、高適詩の「州縣才難適」の表現を踏まえ、また「寧堪作吏風塵下」という屈辱的な心情に通ずる。さらに李頎詩の「折腰（高適のへりくだった態度）」という措辞は、前掲の高適「留別」詩末句の「應念茲晨去折腰」を承けており、そしてそれは「揣摩慙點吏」という狡猾な下っ端吏員のように上役の気持ちを押し量っている卑屈な態度を恥じる態度や「拜迎官長心欲碎」という心が折れそうな官吏生活を一言に集約したものであ

ろう。李頎は高適から右のような詩を呈せられて、それを題材に詩句を作ったと考えて間違いなからう。先にも述べたがこのように高適の封丘における詩作を李頎詩が取り込んでいることは、李頎のこの詩が、洛陽での高適「留別」詩と同時に作ではなく、その後李頎が封丘県に高適を訪ねたときの作品であることの証拠となると考えられる。

右の李頎詩は、士人同士の交遊から、長い布衣生活、地方下級官僚任官など当時の多くの士人達が経験したのである苦難を、高適という個人について伝える記録となっておりと位置づけることができよう。

いま一首高適に贈った作品を掲げる。「答高三十五留別便呈于十一」（卷一三三）である。

- | | |
|------------|----------------------|
| 01 鬘薦賢良皆不就 | 累りに賢良に薦めらるるも皆就かず |
| 02 家近陳留訪耆舊 | 家は陳留に近く 耆旧として訪ねらる |
| 03 韓康雖復在人間 | 韓康は人間に在りと雖復も |
| 04 王霸終思隱巖竇 | 王霸は終に巖竇に隠るるを思ふ |
| 05 清冷池水灌園蔬 | 清冷池の水は園蔬に灌ぎ |
| 06 坐釣滄江心澹如 | 坐して滄江に釣り 心は澹如たり |
| 07 妻子歡同五株柳 | 妻子は五株の柳を同じくするを歎び |
| 08 雲山老對一牀書 | 雲山 老に一牀の書に對す |
| 09 昨日公車見三事 | 昨日 公車にて三事に見え |
| 10 明君賜衣遣爲吏 | 明君 衣を賜いて吏と爲らしむ |
| 11 懷章不使郡邸驚 | 章を懷くも郡邸をして驚かしめず |
| 12 待詔初從闕庭至 | 詔を待ちて初めて闕庭從り至る |
| 13 散誕由來自不羈 | 散誕として 由来 自ら不羈なり |
| 14 低頭授職爾何爲 | 頭を低くして職を授かり 爾は何をか爲さん |
| 15 故園壁挂烏紗帽 | 故園には壁に烏紗帽を掛け |
| 16 官舍塵生白接羅 | 官舎には塵の白接羅に生ぜん |
| 17 寄書寂寂於陵子 | 書を寄す 寂寂たる於陵子 |
| 18 蓬蒿沒身胡不仕 | 蓬蒿に身を没して胡ぞ仕えざる |
| 19 藜羹被褐環堵中 | 藜羹に褐を被る 環堵の中 |
| 20 歲晚將貽故人恥 | 歲晚れて將に故人の恥を貽さんとす |

第九句以下四句で高適が官職を得たことを歌っているが、高適の封丘での詩

作を反映していないことや、「答高三十五留別」という詩題から、この作品は、高適が洛陽から封丘県に赴く直前の作品である「留別鄭三章九兼洛下諸公」に答えたものとしてよい（してみると李頎は「洛下諸公」の一人ということになる）。譚優学「李頎行年考」、劉宝和「評注」、そして陳貽熾主編『増訂注釈全唐詩』（劉彥成等担当）が、そう比定するのに左袒する。

于十一は、于逖という人物。『全唐詩』小傳（卷二五九）に「于逖、開元時人。李白、獨孤及皆有詩贈之。亦與元結友善。詩二首。」とある。

第一句は、高適がしばしば賢良として推挙されたにもかかわらず、すべてそれをことわり官に就かなかつたことを言う。実際には、高適が有力者の推薦を得て何度も制科を受験したが落第したということであろう。このことは、高適の伝記資料には見えないものである。伝記史料では、開元二十三年の受験と落第、前掲天宝八載の「有道科」の制科受験と合格しか判明していない。第二句は、高適を「耆舊」として訓んでみた。高適が住まいした宋州宋城県は、陳留郡（＝汴州、治浚儀県・開封県）の隣県であった。なお、また「陳留」とあるのは「耆舊」とあわせて考えると、陳留の「耆舊」と顕彰された范丹（蔡邕「范丹碑」、『全後漢文』卷七七）など、この地に仰ぎ慕われる老人が多く記録されたからであろう。『藝文類聚』『初學記』『北堂書鈔』に見える『陳留耆舊傳』なる書物の存在からもそのことが判明する。

第三句から第八句までは、高適の布衣の生活、官僚となっていない在野の生活を隠棲と見立てて描く。「韓康」は後漢の隱者で、桓帝の招きをやむを得ず仕官したが、最後は隱遁し、天寿を全うした（『後漢書』卷八三・逸民列傳・韓康列傳）。「王霸」も後漢の隱者で、王莽が漢を篡奪した時、官を辞める。光武帝の建武年間に尚書となるが、のち辞し、隱棲のまま寿を終えた（『同』王霸列傳）。第五句「清冷池水灌園蔬」については、「清冷池」が、高適が暮らしていた宋城県にあった池で、個別・具体的な生活を伝える。おそらく、高適は宋城県の所有地で野菜栽培などの農業を営んでいたのであろう。王泠然「清冷池賦」（『全唐文』卷二九四）があり、また『元和郡縣圖志』卷七・河南道三・宋州に「宋城縣。……清冷池、在縣東二里。」とある。第七句目に「妻子（つま）」が描かれるのは、「五柳先生傳」の作者・陶淵明の伝に「其妻翟氏、志趣亦同、能安苦節。夫耕於前、妻鋤於後云。」（『南史』卷七五・隱逸列傳上・陶潛列傳）とあるのに基づくが、士人の日常生活の妻が詩に描かれた

一例として注目できよう。さらに推測が許されるならば、のちの第十一句では漢の朱買臣が典故とされるが、彼はそのうだつの上がらなから妻に見捨てられたが、高適の妻はしっかりと不遇時代を支えてきた糟糠の妻であることを示唆しているのかもしれない。かく推測するのは、先に引用した高適「封丘作（一作縣）」の「拜迎官長心欲碎、鞭撻黎庶令人悲。」に続くのが、「歸來向家問妻子、舉家盡笑今如此。（婦り來たりて家に向いて妻子に問えば、家を挙げて尽く笑う。今は此くの如しと。）」とあり、どうやら高適の妻や家族は高適とは違って楽天的な態度で彼に接し、彼の精神的均衡を保っていたふしさえ感じられるからである。

第九句から第十六句は、高適の有道科及第と封丘尉任命について述べる。第十一句「懷章不使郡邸驚」の「章」は官吏の印章であり、漢の朱買臣の故事の反転。朱買臣は会稽郡太守の留守役宅に寄宿し、吏からも軽んぜられていたが、会稽郡太守を拜して郡邸に帰ると、郡邸の者がその印綬を見て大騒ぎになった（『漢書』卷六四上・朱買臣傳）。高適の場合は、当然であるので、誰も驚かない。第十四句「低頭授職爾何爲」には、前掲の高適詩で見られたような、高適の強烈な自負と今回の任官の落差による失意が、既に予見されており、李頎の人物観察眼の鋭さを示しているよう。

末四句は、于逖に呈された詩句である。于逖の不遇と貧窮の生活を中心に構成されている。「於陵子」は、戦国時代の隱士で、陳仲子。楚王が宰相に招いたが断わり、人に雇われて農作業をしていた（『史記』卷八三・鄒陽列傳・裴駮集解）。第二十句は、于逖が晩年になつても仕官していないことを仕官がなくなった友人の高適が我がことのように恥じ入るといふ意味であろう。第十九句の「褐」は、官職に就いていない者が着る粗末な衣裳を言う。「被褐」は、当然ながら、官職を得て官服を着るためにそれまで着ていた褐を脱ぐ「釈褐」の対義語として意識されている。また李白「留別于十一兄述裴十三遊塞垣」（卷一七四）の中に「于公白首大梁野、使人悵望何可論。既知朱亥爲壯士、且願東心秋毫裏。秦趙虎爭血中原、當去抱關救公子。」とあり、李頎詩と同様、于逖が大梁（開封）で年老いて隱棲しているのを、世に出るよう待望されている。なお于逖の居る開封は高適の任地・封丘の附近であることから、末句には、高適が于逖の出仕を援助すべきであるといふ提言の意味も含まれよう。

以上のように、李頎の高適に贈った作品には、高適にかかる伝記史料に見ら

れない事跡が記され、また後世の伝記史料の典拠と考え得る表現が見られるなど、史料的にも記録性が高いことを確認できるであろう。また于述を含めた当時の士人の交遊の実態、特に李頎が高適詩の表現に基づいて詩句作りをするなど、士人（詩人）の交遊の文学的側面も明らかになったであろう。抽象的表現ではなく、個別・具体的に士人の生態を描写する李頎詩の特徴が上記二首にも顕著であると考えられる。

（七）

前節の高適への贈詩の内容とも関わるが、周知の如く士不遇は『楚辭』以来の中国古典詩の主要なテーマであった。本節では、その士人の不遇を描いた作品を中心に論ずる。まず「東郊寄萬楚」（卷一三三）を掲げる。

01 濩落久無用 濩落して久しく用らるること無く

02 隱身甘采薇 身を隠して采薇に甘んず

03 仍聞薄宦者 仍なほ聞く 薄宦の者の

04 還事田家衣 還また田家の衣を事とするを

05 穎水日夜流、06 故人相見稀。07 春山不可望、08 黃鳥東南飛。09 濯足豈長往、10 一樽聊可依。11 了然潭上月、12 適我胸中機。

13 在昔同門友 在昔は同門の友

14 如今出處非 如今は出處ま非かく

15 優遊白虎殿 白虎の殿に優遊し

16 出入青瑣闈 青瑣の闈に出入す

17 且有薦君表 且つ 君を薦むるの表有りて

18 當看攜手歸 當に手に携えて帰するを看るべし

19 寄書不代面 書を寄するも面するに代えず

20 蘭茝空芳菲 蘭茝は空しく芳菲す

万楚という人物については、『國秀集』目録・卷下「進士萬楚二首。」「唐詩紀事」卷二十「楚、登開元進士第。」ということがわかるだけである。李頎と同時代に生きた進士及第者であったが、詩からは官途では不遇であったと推察される。冒頭二句は李頎自身の不遇、次の二句は万楚の帰田を述べる。万楚の場合、おそらく官職の任期満了に伴うものであり、「薄宦」とあることから比較的長い待選期間に入ったのであろう。第十三句以下四句は、万楚の「同門友」つまり進士及第の「同年」が中央政界で活躍していることを述べ、次の二

句で彼らが万楚を推挙するだろうと励ます。

本作品においては、李頎の鋭い観察眼による人物描写がとりたててなされているとは言い難い。表現も基本的に、「古詩十九首」其七「昔我同門友、高舉振六翮。」（『文選』卷二九）、潘岳「爲賈謐作贈陸機」「優遊省闈、珥筆華軒。」（『同』卷二四）、范雲「古意贈王中書」「攝官青瑣闈、遙望鳳皇池。」（『同』卷二六）など、『文選』の語彙や発想によりながらなされている。敢えて指摘するならば、士人の不遇を歌うという同じ文脈において、「同門友」が「古詩十九首」では「不念攜手好、棄我如遺跡。」と出世した後に主人公を顧みない設定であるのに対して、李頎の詩では「同門友」の万楚に対する援助を期待するという反転がなされ、異化作用を起こしていることに注意してよいだろう。それに関連して論者が注目したいのは、冒頭四句、李頎が官途にないだけではなく万楚も不遇であるという、不遇感の共有、士人間の連帯意識である。第三句第一字「仍」という散文的な語彙には、「自分だけではなく、友人までも」なおその上」という意味がここでは強く込められていると考えたい。そう考えると前掲の高適に対する「吾觀聖人意、不久召京師。」や本詩の第十七・十八句は、単なる相手に対する慰めや挨拶の言辭ではなく、多くの中下級の不遇士人たちの紐帯と社会的上昇を強く希求するものであったのではなかろうか。盛唐詩に限ってみてもあまた見られる不遇の嘆きやそれに対する慰撫や激励の言辭は、当時の不遇知識人の集団的意識から生じたものだったと思われる。そしてのちに述べるが、自らのそうであった不遇が、李頎の士人描写の重要な動機のひとつと考えられるのである。

次に、「送劉方平」（卷一三三）を掲げよう。

01 綺紈遊上國 綺紈 上國に遊び

02 多作少年行 多く作る 少年行

03 二十二詞賦 二十二の詞賦

04 惟君著美名 惟だ君は美名を著わす

05 童顏且白皙 童顏にして且つ白皙

06 佩德如瑤瓊 佩德は瑤瓊の如し

07 荀氏風流盛 荀氏 風流盛んにして

08 胡家公子清 胡家 公子清し

09 有才不偶誰之過 才有るも不偶なるは誰の過あやまちぞ

10 肯即藏鋒事高臥 肯えて即ち鋒を藏して高臥を事とす

11 洛陽草色猶自春 洛陽 草色 猶自お春なり

12 遊子東歸喜拜親 遊子は東歸して拜親を喜ぶ

13 漳水橋頭值鳴雁、14 朝歌縣北少行人。15 別離斗酒心相許、16 落日青郊半

微雨、17 請君騎馬望西陵、18 爲我殷勤弔魏武。

劉方平については、『新唐書』卷七十一上・宰相世系表一上・河南劉氏「父の劉」微、字可大。吳郡太守。江南採訪使。「方平。」（一族の劉崇望が昭宗の時に宰相となっている）、『新唐書』卷六十・藝文志四・丁部集録・別集類「劉方平詩一卷。河南人。與元魯山善。不仕。」とある。これらによれば、父が地方の大官として出世したが、息子の劉方平は布衣のまま生涯を終えたようである。また李華、蕭穎之、蘇源明、賈至、顏真卿、皇甫冉、元結らの古文運動家集団の頂点であった元徳秀と親しかった。吳汝煜『唐五代人文往詩索引』によれば、皇甫冉からの贈詩が十首伝わる。古文運動と関わりが深かったと推定される。ただし『全唐詩』卷二五一に詩を伝えるが、『全唐文』には文を載せない。

第一句「綺紈」は美しい衣、あやぎぬとねりぎぬであり、劉方平が大官の子弟であることを示している。冒頭八句は、その文才、容貌、人格、家柄の高さを讃える。第七句「荀氏」云々は、後漢の名士・荀淑の息子八人がすべて世に称賛されていた故事（『後漢書』卷六二・荀淑列傳）を借りる。第八句「胡家」云々は、西晋の胡威が父の胡質と同様に「清慎」を以て称されていたこと（『晉書』卷九十・良吏列傳・胡威列傳）に基づく。しかし父が地方のエリート官僚であったにもかかわらず、息子は無官に終わった。第九句「有才不偶誰之過」は、世の中が劉の才能を認めないという抽象的な指弾だけではなく、不遇である明確な理由があったことをほめかしているとも思われるが、それは、明らかにはされていない。この作品は、父が榮達していてもその息子が必ずしも出世するとは限らないという、当時の官界の状況を伝える貴重な史料と位置づけることができる。

さて本論(二)において、李頎の詩歌に贈詩対象相手の兄弟に言及するものが目立つことを述べた。李頎詩にも後に触れる「従弟」に贈った作品と、親族に贈る次の作品が見られる。「春送従叔遊襄陽」(卷一三二)を掲げる。

01 言別恨非一 別れを言いて 恨み一に非ず

02 棄置我宗英 我が宗英を棄置す

03 向用五經筭 向きには五経の筭を用ちいられ

04 今爲千里行 今は千里の行を爲す

05 裹糧顧庭草 糧を裹みて庭草を顧み

06 羸馬詰朝鳴 羸馬は詰朝に鳴く

07 斗酒對寒食、08 雜花宜晚晴。09 春衣采洲路、10 夜飲南陽城。11 客夢峴山

曉、12 漁歌江水清。13 楚俗少相知、14 遠遊難稱情。

15 同人應館穀 同人 応に館穀すべし

16 刺史在郊迎 刺史 郊に在りて迎えん

17 只合侍丹扆 只合に丹扆に侍るべきに

18 翻令辭上京 翻つて上京を辭せしむ

19 時方春欲暮 時に方に春は暮れんと欲す

20 歎息向流鶯 歎息して流鶯に向かう

誰かは不詳であるが李頎の従叔(父の従兄弟で父より年下の者)が襄陽に行くのを送る作品である。訓読を付した部分から、従叔はその学問によって恵まれた境遇にあった、おそらく都で任官していたのであろうが、今はそれとは対象的な低い境遇となり、襄陽へ赴くのであろう。「羸馬」とあるので、やせ衰えたとは言え「馬」に乗っているのであり、襄陽の官僚としての赴任であると考えてよいであろう。赴任に到る事情は詳しく述べられないが、冒頭二句の「言別恨非一、棄置我宗英。」は、李頎のただならぬ憤りを感じしめる。第十五句の「同人」という表現も単に旅先の知り合いというのではなく、志を同じくする人という意味ではなからうか。推測に過ぎないが、論者は、李頎の従叔が中央政界での何らかの権力闘争に関係して地方に出されるのを送った詩であるように思える。いずれにせよ、本論(二)で指摘した贈詩対象相手の兄弟への言及は、宗族・親族の連帯意識という点で、この作品と通底すると考えられ、これも当時の士人の精神的な生熊の一つであると見做すことができる。

さて本論初めに紹介したように、李頎は進士科に及第したが、衛州新郷県尉となったことが判明しているだけでその他の官歴は不詳であり、官途では成功しなかったと考えてよいだろう。これまでに見てきた李頎詩に描かれた士人はほぼ官途において不遇であるか成功前の人物である。本人も決して成功したとは言えない人生にあって、李頎がこのような士人の生熊を記録するのは、証拠を挙げることはにはわかにできないが、司馬遷が「儻所謂天道、是邪非邪。」

『史記』卷六一・伯夷列傳」という大きな悲憤慷慨と問題意識を発端として、不朽の史書を著わし（発憤著書）、後世に残して自らの名声を永遠たらしめることよって、宮刑という恥辱を解消せんとし、そして同時に正しく生きながらもややもすれば歴史の中に埋もれてしまいうような人を顕賞し、逆に醜悪な欲望のままに生きた人に死後の汚名を与えようとした、というほど大袈裟な動機ではなかったかもしれないが、李頎には自らがそうである不遇の士人の様々な生懸、敢えて言うなら生きた証しを後世に伝えんとする、そして彼らの存在を不朽ならしめる意図があつたのではなからうか。またその意図の源泉を伝統的知識人共通の教養書である『史記』に求めることはあながち的外れではなからう。更に李頎の場合は、士人達の生懸を同時代に伝播して共有し、同様の境遇の士人間における連帶的意識を醸成する意図も存在していたのではなからうか。そのように考えてみると、「寄萬齊融」（卷一三二）に、

- 01 名高不擇仕 名高くして仕を扱はず
 02 委世隨虛舟 世を委てて虚舟に随う
 03 小邑常歎屈 小邑 常に屈を歎げかれ
 04 故郷行可遊 故郷 行ゆく遊ぶ可し
 05 青楓半村戸 青楓は村戸に半ばし
 06 香稻盈田疇 香稻は田疇に盈つ
 07 爲政日清淨 為政は日び清淨にして
 08 何人同海鷗 何人も海鷗と同じくす
 09 搖巾北林夕 巾を揺する 北林の夕
 10 把菊東山秋 菊を把る 東山の秋
 11 對酒池雲滿 酒に對して 池に雲滿ち
 12 向家湖水流 家に向いて 湖水流る
 13 岸陰止鳴鶴 岸陰りて 鳴鶴止み
 14 山色映潛蚪 山色 潜蚪映ず
 15 靡靡俗中理 靡靡たり 俗中の理（俗中理まる）
 16 蕭蕭川上幽 蕭蕭たり 川上の幽
 17 昔年至吳郡 昔年 吳郡に至り
 18 常隱臨江樓 常に臨江の樓に隱る
 19 我一書札 我一書札有り

20 因之芳杜洲 因りて芳杜の洲に之かん（因りて芳杜の洲に之らん）

とあるのは、『舊唐書』卷一九〇中・文苑列傳中・賀知章列傳に「賀知章、會稽永興人、太子洗馬德仁之族孫也。……先是神龍中、知章與越州賀朝、萬齊融、揚州張若虛、邢巨、湖州包融、俱以異越之士、文詞俊秀、名揚於上京。朝萬止山陰尉、齊融崑山令、若虛兗州兵曹、巨監察御史。融遇張九齡、引爲懷州司戶、集賢直學士。數子人間往往傳其文、獨知章最貴。」と著名文人・賀知章と同郷のよしみにより「文詞俊秀」な士人に数えられたものの、崑山令に終わったことがようやくその具体的な生の痕跡として「文苑」の記録に連なり得た万齊融について、李頎がその名利に齷齪しない態度と彼に対する世間の期待、治世者としての功績、脱俗的生活を描くのは、詩的な修辭や挨拶の言辭が含まれるとしても、万齊融の顯彰が根底にあり、その人となりを同時代・後世に伝えんとする意図があつたと言えるのではなからうか。この作品には、全篇に清涼さ、靜謐さ、透明性といったものを感得できよう。それは、このような意図を実現するために、本詩を単に挨拶的言辭にとどまらせない、李頎の苦心の現われと考へてもよいであろう。交遊詩における士人描写等を單なる挨拶的社交辭令と捉えるだけではなく、右のような視点から見直し、盛唐の士人・詩人たちがお互いを描きあい時には顯彰し合うことで何をなさんとしていたのかという時代の思潮を検証することも課題でありうると思われる。

本節最後に、必ずしも不遇の人士とはいえないが、当時の士人の生懸を伝えたい「崔五宅送劉跂入京」（卷一三二）を掲げる。

- 01 行人惜寸景 行人 寸景を惜めども
 02 繫馬暫留歡 馬を繫ぎて暫く歡を留めよ
 03 昨日辭小沛 昨日 小沛を辭し
 04 何時到長安 何時にか長安に到る
 05 鄉中飲酒禮 鄉中 飲酒の礼
 06 客裏行路難 客裏 行路難し
 07 清洛雲鴻度 清洛 雲鴻度り
 08 故關風日寒 故關 風日寒し
 09 維將道可樂 維れ道を持て樂しむ可し
 10 不念身無官 身の官無きを念わざれ
 11 生事東山遠、12 田園芳歲闌。13 東歸余謝病、14 西去子加餐。15 宗伯非徒

爾、16明時正可干。17躬耕守貧賤、18失計在林端、19宿昔奉顔色、20慚無雙玉盤。

作品の制作時期等は明らかにはできないが、おそらく、李頎が莊園を営んでいた河南府潁陽県（河南省登封県西）の崔五なる知人の邸宅において、第三句、江南の「小沛」すなわち徐州沛県（江蘇省沛県）から帝都における科挙受験に向かう途次にあった劉跂なる人物を激励する送別の宴における作品であろう。劉跂への激励と李頎自身の失意を述べた作品であり、特に冒頭四句に、李頎の人物に対する鋭い観察眼が伺える。

劉跂は、第五句「郷中飲酒禮」から郷里において郷貢進士として盛大な「郷飲酒の礼」によって欲送されたことがわかる。「郷飲酒礼」は、周代、地方から優秀な人物を君主に推薦するとき、郷大夫（郷の長官）が主人となって開く送別の宴であり、『儀禮』に「郷飲酒禮」篇があり、『周禮』地官司徒・郷大夫に「郷大夫之職、各掌其郷之政教禁令。……三年則大比。攷其德行道藝、而興賢者能者。郷老及郷大夫帥其吏、與其衆寡、以禮禮賓之。厥明、郷老及郷大夫羣吏、獻賢能之書于王。王再拜受之。」鄭玄注「言興者、謂合衆而尊寵之、以郷飲酒之禮、禮而賓之。」とある。この伝統にならない、唐代にも、地方から都に科挙受験に赴く者に対して、「郷飲酒の礼」を行なった。『唐摭言』巻一・貢舉釐革并行郷飲酒「開元二十五年二月、敕應諸州貢士、上州歲貢三人、中州二人、下州一人。必有才行、不限其數、所宜貢之。解送之日、行郷飲禮、牲用少牢、以官物充。」「新唐書」巻四四・選舉志上「每歲仲冬、州、縣、館、監舉其成者送之尚書省。而舉選不繇館、學者、謂之郷貢。皆懷牒自列于州、縣。試已、長吏以郷飲禮、會屬僚、設賓主、陳俎豆、備管絃、牲用少牢、歌鹿鳴之詩、因與耆艾敘長少焉。既至省、皆疏名列到、結款通保及所居、始由戸部集閱、而關於考功員外郎試之。」とある。これらによると「郷飲酒の礼」は、州県政府によって選ばれし数名の者のためだけに挙行される公的で盛大な欲送のハレの儀式であった。そしてそれによって送り出される郷貢進士は、当然、郷里の人々の期待を一身に背負い大志に満ち同時に厳しい責務感に拘束されたことであろう。まして進士科に合格し官僚となれば、宗族に大きな利益を誘導できたはずである。そのような自他の期待は、劉跂に緊張と焦燥をも、もたらしたに違いない。なお郷飲酒礼による欲送は開元六年頃に始まっていたようである。

如上の背景から冒頭四句を見直すと、大志と責務を懷いた劉跂は、昨日郷里

を出発し既に洛陽近くの潁陽に来ており、明日にでも入京しそうな勢いで、時間を惜しんでいることがわかる。「昨日」は詩的誇張かもしれないが、冒頭四句は先を急ぎ血気に燃える劉跂の姿をみごとに表現している。その劉跂の焦燥と緊張は、それをやわらげんとする第九・十句「維將道可樂、不念身無官。」の李頎の忠告にも似た言葉からも見て取れよう。前のめりになる劉跂に対して、李頎がなだめ、まあ落ち着いて一杯やりなさい、というのが第二句目の意味であろう。第六句「客裏行路難」も、旅路は苦勞が多いからこそ一服していきなさいという意味と、これから劉跂が歩む人生行路の困難を李頎自身の経験から述べているのであろう。

このようにわずか十句ではあるが、当時の科挙受験を控えた士人（劉跂はおそらく比較的若い世間知らずの秀才タイプではなかったろうか）の姿が伝わってくるところに、やはり李頎の士人描写における勘所の良さを確認できるのではなかるうか。

(八)

本論の最後に、本節においては李頎の自述詩を考察する。前節の比喩を借りると『史記』太史公自序に相当する詩歌である。

以上に紹介したように他者の士人としての生態をその特徴を勘所良く捉えて個別・具体的に活写した李頎が、自己をどう描いたかは、李頎文学における士人描写の全体像を俯瞰する上で一考に値すると思われる。

まず「緩歌行」（卷一三三）という楽府を掲げる。

- 01 小來託身攀貴遊 小來 身を託して貴遊に攀づ
- 02 傾財破産無所憂 財を傾け産を破るも 憂うる所無し
- 03 暮擬經過石渠署 暮には石渠署を経過せんと擬し
- 04 朝將出入銅龍樓 朝には將に銅龍樓に出入せんとす
- 05 結交杜陵輕薄子 杜陵の輕薄子と結交し
- 06 謂言可生復可死 生くとも可なり復た死すとも可なりと謂言う
- 07 一沈一浮會有時 一沈一浮 會す時有り
- 08 棄我翻然如脫屣 我を棄つること翻然として屣を脱ぐが如し
- 09 男兒立身須自強 男兒 身を立つるには 須く自強すべし
- 10 十年閉戸潁水陽 十年 戸を閉ざす 潁水の陽
- 11 業就功成見明主 業就り 功成り 明主に見ゆ

- 12 擊鐘鼎食坐華堂 擊鐘 鼎食 華堂に坐す
 13 二八蛾眉梳墮馬 二八 蛾眉 墮馬を梳り
 14 美酒清歌曲房下 美酒 清歌 曲房の下
 15 文昌宮中賜錦衣 文昌宮中 錦衣を賜わり
 16 長安陌上退朝歸 長安陌上 退朝して歸る
 17 五陵賓從莫敢視 五陵の賓從 敢えて視る莫く
 18 三省官僚揖者稀 三省の官僚 揖する者稀れなり
 19 早知今日讀書是 早つとに今日の讀書の是なるを知らば
 20 悔作從前任俠非 從前の任俠を作すことの非なるを悔いしものを

李頎の「緩歌行」は『樂府詩集』卷六五・雜曲歌辭五・前緩聲歌の項に載せられている。その解題には、「晉陸機前緩聲歌曰、游仙聚靈族、高會曾城阿。言將前慕仙游、冀命長緩、故流聲於歌曲也。宋謝惠連又有後緩聲歌、大略戒居高位而爲讒諂所蔽、與前歌之意異矣。按緩聲本謂歌声之緩、非言命也。又有緩歌行、亦出於此。」とある。解題の通り、『樂府詩集』に載せる古辭、陸機、孔甯子、謝靈運、沈約の歌辭は遊仙を主題とし、残る謝惠連と李頎の歌辭が「言命」（運命や天命について述べる）を主題とするものようである。ただ謝惠連の歌辭が「高位に居りて讒諂の蔽う所と爲るを戒しむ」内容であるのとは異なり、李頎の歌辭は若いときの放蕩と科擧及第を歌っている。にわかには論断できないが、李頎が「緩歌行」の樂府題の下で科擧及第にまつわる歌辭を作ったのは、当時の士人達の目標・憧憬の的であった中央政界を華麗な仙郷に置換し、そこでの経験を「遊仙」に見立てたのかもしれない。なおこの作品は擬古樂府であるので、そのまま李頎自身のことを述べる自述詩と扱うことはできない。ただ科擧（李頎の場合は進士科）及第という士人としての人生の大目標を達成した歓喜の経験と感情を、士人としての節度の態度でもあろう、直接自分自身のこととして表現するのを抑制し、樂府という假構を借りることによって却って率直に表出することを目論んだとも考えられよう。

第一句から第八句は、樂府の主人公の若い時代の放蕩の生活を描く。「貴遊」は、王侯貴族の子弟で官職に就いていない者、つまり上流社会の無職の若者を指す。彼らとの交遊においては第二句にあるように、財産を蕩尽する覚悟が必要であったのだろう。第三・四句、「石渠署」（「石渠閣」）は、漢代の宮中図書館。「銅龍樓」は、漢の皇太子の宮門である銅龍門の門樓、つまり皇太子

の居所。財貨を使つてつてを作り、交遊範圍を王室にまで広げていたことを言うのであろう。第五・六句は、遊俠との交遊を描く。「杜陵」は長安付近の前漢の宣帝の陵。陵下の町に富貴の者を多く移住させたので、自ずから遊俠の氣風が生まれたと思われる。ここではひろく長安地域の遊俠との交わりを言うのであろう。なお遊俠の群像、「生の過刺」の具現としての彼らの諸生態については、大室幹雄氏の文章に譲りたい。ただ大室氏が指摘するように、遊俠の出身が汎階級的であり、彼らの中には皇帝の身辺に存在した者もいたことは注意されてよいだろう。また日野開三郎氏の「豪俠が豪俠として売り出すには莫大な資金を要し、従つて豪俠の多くが巨産の豪家出身で然もその資産を潰していたとすれば、富豪である在地莊家が豪俠を生み出す有力な母胎層をなしていたのではないか」（傍点：川口）という指摘も考慮に値する。日野氏と大室氏の指摘を考え合わせれば、李頎の樂府の冒頭八句は次のような士人の生態を描いているのではなからうか。土地経営によって財を有する士人が、遊俠となつたあるいはそれに近似した貴族の子弟たちと交遊し、貴頭との繋がりをもとめたり、都にたむろするいわゆるチンピラやごろつきといった下層の義俠を統べる豪俠的な存在となつて著名となることを目指した、ということである。ただしその末路は、第八句目、おそらく財が尽きたことによつて、掌を返すように取り巻き連中が主人公から離れていった。これらのことが李頎の現実に符合するか否かは樂府であるゆえにいっそう判断できないが、それが当時の士人達の生態の一つであったことは確かであろう。なお詩歌における遊俠の描写は、李頎のほかにも李白、王維、高適、王昌齡、崔顥、岑參、杜甫らの作品にも見られ、また駱賓王、陳子昂、王之渙、王渙、李白、高適、韋応物についてはその伝記史料に遊俠や無頼の時期が確認できる。これらの士人の生活史における遊俠の意味は更なる探求を待つ課題であろう。

第九・十句は、主人公が今までの放蕩を悔い改め、科擧及第を目指して勉学に励んだことを歌う。ここで注意すべきは「潁水陽」である。これは詩歌に常用される歌枕（詩跡）ではなく、李頎が住まいした場所であり、この樂府の主人公が李頎であることを読み手に強く意識させる措辞である。その意味での詩歌は李頎の自述詩である性格も有していると考えられる。

第十一句から第十八句までは、科擧（進士科）合格とそれに伴う人生の絶頂が描かれる。歌謡の歌辭として修辭を凝らして描かれているが、実際には進士

科合格発表後の華々しい行事を指していると考えられる。その実際はおおむね次の通りである。

新進士たちは、二月の合格発表後、知貢挙宅を訪問し、謝恩と宴会が催される。この時、知貢挙と新進士は、座主と門生という師弟関係を結び、その関係は以後も強く維持された。次に宰相を大明宮の中書省都堂（政事堂）に訪問する「過堂」が行なわれ、再び、知貢挙宅に赴き宴会が催された。三月になると進士同士の私的な宴会が催された。これには、「桜桃宴」（もぎたての桜桃の赤い小さな果実が供された）、「月燈閣」（長安城郊外、延興門東約五キロ）前広場での打毬と打毬後の閣での宴会、「牡丹の宴」、「看仙牙」（長安には仏歯を安置した仏牙楼が崇聖寺・宝寿寺・定水寺・莊嚴寺等の大寺にあった。その寺院へ赴き、その仏歯を拝観し、その後宴会が催された）がある。次に「関試」（吏部選院での簡単な儀礼的な試験。試験後、吏部に姓名を登録され、姓名等を記した「春関」を授かる）と続く。これは「釈褐試」とも呼ばれ、処士の着る褐（麻衣）を脱いだ。第十五句「賜錦衣（褐の代わりの錦衣を下賜された）」は、このことを指していると考えられる。そしてクライマックスとも言べき「曲江宴」が催される。これは、皇帝が新進士たちに下賜する宴であり、慈恩寺北側の尚書省の亭子が第一会場となり、次いで曲江池において京兆府から貸し出された舫子（屋形船）に乗り宴会を行なった。この時、教坊から楽人や妓女が貸し与えられたり、宮廷の特別料理が供されたりした。「曲江宴」は長安の晩春から初夏の風物詩であり、大勢の見物人が繰り出し長安の街はほとんどからになり、皇帝も楼上から見物した。また曲江池の周辺には高官たちの車馬が連なつたが、これは新進士たちの中からはめばしい者を女婿に選ぶためであつたらしい。このあと、杏園に上がつての宴会となる。これは探花宴とも呼ばれ、二人の若くて俊敏な新進士を探花使とし、長安の名園から牡丹などの名花を摘んで持ち帰る競争をさせる（杏園探花）。最後に「題名」がなされ、慈恩寺の雁塔の下の壁に、新進士のうちの最も達筆な者が全員の名を書いた。右のような儀礼が李頎の頃にどこまで完成していたか論者には今論じる準備はないが、これによく似た栄華を、少なくとも精神的、感情的には、新進士たちは享受していたことであろう。

このような世界の中心たる帝都において選ばれし者だけが与り得る栄光から鑑みるに、第十一句以下五句の豪勢な描写は、その余りな過剰さゆえに楽府と

いう枠組みであつてこそ描き得たのであろう。第十六句「長安陌上退朝歸」は、簡単な描写であるが、以上の文脈から見た場合、そこにエリートとしての矜持豊かな歩みを感じ得きよう。この李頎が颯爽と歩む「長安陌」は、帝都の中心を南北に貫く、左右の坊牆に囲まれた長大な広場とも言うべき道幅一五〇ないし一五メートルもあつた朱雀大街を想定してもよいであろう。そしてその矜持ゆえ、続く第十七・十八句、長安附近の貴顕の者が住む五陵の賓客やその供回りの者でさえ主人公の威光を恐れてあえてまともに顔を見ようとせず、帝国の政治の中核である三省の役人でさえも軽い「揖」の礼ですませる者はめったにいないのである。末二句は、任侠の世界に入ったことで学業を始めることが遅れたことへの後悔と反省が述べられるが、王昌齡「從軍行二首」其一「早知行路難、悔不理章句。」（巻一四〇）の悔やんでも手遅れであるとは異なる、成功者の言葉である。

この詩に見られる前半の放蕩と後半の刻苦勉勵の賜物としての栄華とは、ともに盛唐らしいエネルギーシユな気象、大室氏の言葉を借りれば「生の過剰」の産物として、当時の士人の生感、そして時代の様相を伝えていよう。そして作品自体の鑑賞的評価としては、次々と繰り出される豊かな詩語・詩句によって、たたみかけるような迫力を有したものとなつていると感ずる。

「緩歌行」に投影された李頎の人生の達成は矜持と覇気に満ちたものであつたが、以後の吏部銓選や官途においてそれは続かなかつたと思ふ。既に述べたが、『唐才子傳』巻二「開元二十三年賈季鄰榜進士及第。調新鄉縣尉。」にあるように衛州新鄉縣（河南省新鄉市）の尉に任官した記録が残るだけで、他の官歴は不詳である。新鄉縣も副都洛陽を擁する河南府ではなく、エリートコースである畿県ではない（『新唐書』巻三九・地理志三によれば望県である）。

次いで、新鄉縣尉の離任の後の作品と考えられる「不調歸東川別業」（巻一三二）を掲げる。

- | | |
|----------|-------------|
| 01 寸祿言可取 | 寸祿 取る可しと言うも |
| 02 託身將見遺 | 託せし身は將に遺す |
| 03 慚無匹夫志 | 匹夫の志無きを慚じ |
| 04 悔與名山辭 | 名山と辭するを悔ゆ |
| 05 絨冕謝知己 | 絨冕 知己に謝し |
| 06 林園多後時 | 林園 時に後ること多し |

07 葛巾方濯足 葛巾 方に足を濯い
 08 蔬食但垂帷 蔬食 但帷を垂らす
 09 十室對河岸 十室 河岸に対し
 10 漁樵祇在茲 漁樵 祇在茲に在り
 11 青郊香杜若 青郊には杜若香り
 12 白水映茅茨 白水には茅茨映ず
 13 晝景徹雲樹 晝景は雲樹に徹り
 14 夕陰澄古遠 夕陰は古遠に澄む
 15 渚花獨開晚 渚花は独り開くこと晩く
 16 田鶴靜飛遲 田鶴は靜かに飛ぶこと遅し
 17 且復樂生事 且つ復た生事を樂しみ
 18 前賢爲我師 前賢を我が師と爲さん
 19 清歌聊鼓楫 清歌 聊か楫を鼓し
 20 永日望佳期 永日 佳期を望まん

詩題の「東川別業」は、河南府潁陽県にあった。「不調」は前職（この場合おそらく新郷県）の任期が満ちたあと待選期間を経たが、次の吏部銓選で官職を与えられなかったということであろう。その結果、潁陽の別業において生活することになったということである。当時の士人にとっては、このような顛末でも「隱棲」生活と考えられていたことが詩の述懐から再確認できる。

冒頭二句は、李頎が、下級官吏としてわずかな俸禄を受け取ることができずだったのに、官途に寄せたこの身がいま見捨てられようとしているというふうな意味であり、上述の、吏部銓選に漏れ、次の任官がかなわなかったことを述べていると考えられる。次の二句は、ひとりの男としての志さえ守り通すことが出来ず、つまり官職に就けなかったことを恥じ、かつて（東川の別業近くの）「名山」（嵩山と考えられる）に別れを告げて科挙に合格し官吏となったが、退隱する有様となり、それを悔やんでいるという意味であろう。李頎はおそらく嵩山の寺院で勉学に励んだのに違いない。書籍を豊富に有する山林の寺院は、その静謐な環境と共に士人達の絶好の勉学の場であった。付言するならば、こういった山水に囲まれた環境によって詩人たちの感性が育まれ、それが山水田園詩のジャンルを豊かにしていったのであろう。第七句以降は、李頎の脱俗的な別業生活を描く。

この作品は、「緩歌行」の活気とは対象的な静けさを持つ。「緩歌行」が楽府歌謡であることを考慮に入れても、その落差は大きい。人生の頂点とも言うべき達成における喧噪と挫折による静謐の二作品は、官職にあるか否かといういわゆる世俗的視座によって人生の価値が計られた当時の士人たちの精神世界を率直に反映しているであろう。その意味で、後者の脱俗的な作品も世俗・官界から敢えて隔絶せんとする表現を選択している点で、世俗性を免れていないのである。

なお李頎詩の表現において、わずかな「祿」が下級の官職の比喩となることが目立つ。ここのほかに、「微祿心不屑、放神於八紘。」（贈張旭）、「僂俛從寸祿、舊遊梁宋時。」（贈別高三十五）、「雖沾寸祿已後時、徒欲出身事明主。」（後出）「放歌行答從弟墨卿」。「寸祿」は、左思「詠史八首」其八「外望無寸祿、内顧無斗儲。」として「文選」（卷二一）に見える語彙とはいえ、職祿という直截な表現は、李頎の人物、人間描写における實際を志向する記録性、伝記性という特徴の一端を示していると考えられる。

つづいて「欲之新郷答崔顥基母潛」（卷一三三）を掲げる。

01 數年作吏家屢空 數年 吏と作るも 家屢に空し
 02 誰道黑頭成老翁 誰か道わん 黒頭の老翁と成るを
 03 男兒在世無產業 男兒 世に在りて産業無く
 04 行子出門如轉蓬 行子 門を出づれば転蓬の如し
 05 吾屬交歡此何夕 吾が属 交歡す 此れ何の夕ぞ
 06 南家擣衣動歸客 南家の擣衣 歸客を動かす
 07 銅鑪將炙相歡飲 銅鑪 炙を將て相い歡飲し
 08 星宿縱橫露華白 星宿 縱橫 露華白し
 09 寒風卷葉度滄沱 寒風は葉を卷いて滄沱を度り
 10 飛雪布地悲峨峨 飛雪は地に布き 峨峨たるを悲しむ
 11 孤城日落見棲鳥 孤城に日落ち 棲鳥を見る
 12 馬上時聞漁者歌 馬上 時に漁者の歌うを聞く
 13 明朝東路把君手 明朝 東路 君の手を把り
 14 臘日辭君期歲首 臘日 君と辭し 歲首に期す
 15 自知寂寞無去思 自ら知る 寂寞として去思無きを
 16 敢望縣人致牛酒 敢えて縣人の牛酒を致すを望まんや

新郷県に赴く時の留別の作品と見做せる。崔顥と慕母潜とが揃っているものでおそらく都での詩作であろう。作品の制作背景を考察することは難しいが、敢えて次のように解しておく。冒頭二句と第六句の「歸客」から判断して、李頎が新郷県尉となったあと何らかの理由により都にやってきて、再び任地に帰って行くのであろう。冒頭四句は、自述詩として自己のこれまでの官歴を含めた生活史を語る。生活には支障がないとしても、数年間の県尉としての下級官吏生活では「富貴」と呼べる状態には全く至らず、その意味では「家屢空」であり、「無産業」確固とした産業を築きあげるまでには至らなかったであろう。既に述べたように李頎は進士に及第したものの出世街道からはすでに脱落していたようである。都での任務、出来事が何であつたか推し量るすべはないが、全体として暗いトーン作品である。あるいは吏部銓選や考課に関わり、次の任官がうまくゆかなかつたのかもしれない。末句の「致牛酒」は、牛肉と酒を準備することで、ここでは新郷県の人々が李頎を歓待する意味。それをも拒否しているかの言辞であり、第十五句「自知寂寞無去思」と合わせて考えるに、新郷へ帰ることに全く気乗りではなかつたことが判明する。

上に、楽府と徒詩による自述詩を掲げたが、それらの中間的な詩題の作品がある。「放歌行答從弟墨卿」（卷一三三）を掲げよう。

- 01 小來好文恥學武 小來 文を好み武を学ぶを恥ず
 02 世上功名不解取 世上の功名 取るを解せず
 03 雖沾寸祿已後時 寸祿に沾うと雖も已に時に後る
 04 徒欲出身事明主 徒だ身を出して明主に事えんと欲するのみ
 05 柏梁賦詩不及宴 柏梁 賦詩 宴に与らず
 06 長楸走馬誰相數 長楸 走馬 誰か相い數えん
 07 斂迹俛眉心自甘 跡を斂し眉を俛して 心自ら甘じ
 08 高歌擊節聲半苦 高く歌い節を撃つも 声半ば苦し
 09 由是蹉跎一老夫 是れに由りて 蹉跎たる一老夫
 10 養雞牧豕東城隅 鶏を養い 豕を牧す 東城の隅
 11 空歌漢代蕭相國 空しく歌う 漢代の蕭相國の
 12 肯事霍家馮子都 肯えて霍家の馮子都に事えんやと
 13 徒爾當年聲籍籍 徒爾たり 當年の聲の籍籍たる
 14 濫作詞林兩京客 濫に詞林兩京の客と作る

- 15 故人斗酒安陵橋 故人 斗酒 安陵の橋
 16 黃鳥春風洛陽陌 黃鳥 春風 洛陽の陌
 17 吾家令弟才不羈 吾が家の令弟 才は不羈
 18 五言破的人共推 五言の破的 人共に推す
 19 興來逸氣如濤湧 興來たらば 逸氣は濤の湧きて
 20 千里長江歸海時 千里の長江 海に帰る時の如し
 21 別離短景何蕭索 別離の短景 何ぞ蕭索たる
 22 佳句相思能間作 佳句を能く間作りしを相い思う
 23 擧頭遙望魯陽山 頭を擧げて遙かに魯陽の山を望めば
 24 木葉紛紛向人落 木葉は紛紛として人に向かいて落つ

『文苑英華』（卷二〇三）は、詩題に「答從弟墨卿」がない。『樂府詩集』には採録されていない。詩題のテキスト校勘をする準備は論者にはないが、第一句から第十二句までが樂府歌辭、第十三句以下が從弟に別れる徒詩として捉えることのできるキメラ的な作品であろうか。第十二句までは、「柏梁賦詩」（『三輔黃圖』卷五・臺榭）、「養雞」（王褒「四子講德論」、『文選』卷五二）、「牧豕」（『史記』卷一一二・平津侯列傳）、「漢代蕭相國」（『史記』卷五三・蕭相國世家）、「霍家馮子都」（『漢書』卷六八・霍光傳）など主に漢に時代を借りた歌辭であつたのが、第十三句以下の四句において中継ぎされ、時間が李頎の現在に移行し、第十七句以下、從弟の豊かな才能が描写され、別れの悲哀でしめくられる。

前半の第五・六句は、「緩歌行」に歌われた栄光のあとの帝都での失意の生活之歌うのである。下句は、背の高いひさぎの樹木が両脇に植えられた都郊外の道あるいは都大路を馬で駆けても誰も称賛してくれなかつたということを描くならば、「緩歌行」の第十六句「長安陌上退朝歸」と好対照をなす。中継ぎの第十五・十六句について、「安陵」は長安の北にある漢の惠帝の陵であり、下句に「洛陽」とあるので、上句は李頎がかつて長安を離れたときの友人による送別の宴、下句は今現在の從弟との別れの宴の舞台であろう。

後半の從弟の描写に関しては、第十八句「五言破的人共推」が注目されよう。これは、從弟の五言詩（あるいは五德についての言論）が的を射て理に適つたものであり、人々がそろって彼を推挙していることを言う。「五言」が五言詩の意味であるならば、詩歌批評の資料とすることができよう。さらに詩歌の才

能が士人の才能、教養、技倆などをはかる指標であったことをあらためて確認できよう。なお「五言」が五言詩の意味と考え得る用例として、曹丕「與吳質書」「公幹有逸氣、但未適耳。其五言詩之善者、妙絶時人。」（『文選』卷四二）、江淹「雜體詩三十首并序」序「然五言之興、諒非復古。」（『梁詩』卷四）、劉長卿「送路少府使東京使應制舉」「五言凌白雪、六翻向青雲。」（卷一四八）、韋應物「答秦十四校書」「莫道謝公方在郡、五言今日爲君休。」（卷一九〇）がある。

以上、李頎の自述にかかる作品を一瞥した。総体的に、他者を描いていたときに見られた個別性、具体性を有した記録的、伝記的な描写態度はさほど強くは確認できなかった。一方、楽府という物語的な枠組み、現実を一旦棚上げにしたかたちによって第三者的に描写される作品は、比較的優れていたと思われる。これらの楽府作品に見られる、詞藻が次々と繰り出されるたみかけるような描写には、杜甫が時に自虐的に時にユーモラスに自己の姿を描写した手法に通ずるおもしろさを見出すことができるのではあるまいか。

李頎の士人描写詩の詩歌史における位置づけは、検討した範囲においては、士人描写詩が大きく発展した盛唐詩壇において、特に他者描写について杜甫と比肩しうる達成があったものであると考える。それは繰り返し返しになるが、表現者としての自覚性を持つ、描写対象についての個別・具体的、記録的・伝記的な描写態度であり、そしてそこにそなわる人物描写のおもしろさであった。さらに推測を逞しくするならば、司馬遷に通底する記録者としての態度、つまり自らがそうである不遇の士人の様々な生後世に伝えんとする、そして彼らの存在を不朽ならしめる意図があったのではなからうか。さらに、士人達の生後世を同時代に伝播して共有し、同様の境遇の士人間における連帯的意識を醸成する意図が存在していたとも思われるのである。李頎詩に限定されることではもちろんないのであるが、李頎の詩歌に描かれたことにより、名前だけでなく、その姿や生後世が伝わる士人も本論で紹介したように実際にあったのである。著名士人にあっても李頎詩において伝記史料に見られない事跡を確認できたのである。

但し李頎の自述詩にあつては、特に楽府においてそのおもしろさを感得できたが、他者を描いたときのような個別性・具体性は、さほど強くはなかったと言えよう。またそれ故、李頎の伝記を彼自身の作品から再構成することは困難

なのである。

さて、実は論者は、本論の冒頭において本来なすべき問題提起を放置した。すなわち、何故、李頎の士人描写を論ずるのかという問題意識であり、さらには士人描写を考察した意味である。

李頎自体の研究が、国内外を通して、特に本邦で進んでいないこと、中国における李頎の人物描写論にかかる先行研究に、論者なりの視点で追補できることがあると考えたのが第一の理由である。本論によって、盛唐詩や中国古典詩の豊饒な世界の新たな側面を少しでも解明し、当時の伝統的知識人の生後世の研究に些かなりとも資することができていたら幸いである。

ではなぜ士人（人物）描写詩を組上にのぼらせたのか。その必然性を説明する明確な答えを論者は用意できていない。ただ人間の文化の諸相の中で大きな部分を占める文字による表象、特に字数を切り詰めた表現形式である韻文において、散文であるならば自由に表現できる人物描写を敢えて行なうという文学の営為において、人間は人間自身をどのように描くのかという、記述してみれば極めて平凡な興味に論者が支えられていることだけは確かである。

論中に多く「おもしろい」という印象批評的で非科学的な表現を用いたことに対する批判も承知している。しかし畢竟「おもしろい」としか表わしようがないのである。本来ならばそのおもしろさの仕組みを解明すべきであったのだが、それは今後の課題としたい。

【注】

- (1) 「李頎の士人描写詩について（三）」（『山口県立大学国際文化学部紀要』二三、二〇一七年）。
- (2) 本稿で引用する唐詩については、すべて『全唐詩』（中華書局、一九六〇年）により、その巻数のみを示す。
- (3) 孫欽善「高適年譜」（『高適集校注修訂本』、上海古籍出版社、二〇一四年）による。以下、高適の伝記はこれに従う。
- (4) それぞれ、中華書局・二〇〇三年版、上海古籍出版社・一九八〇年、四川人民出版社・一九八一年、中華書局・一九八一年、山西教育出版社・一九九〇年、鳳凰出版社・二〇〇九年、巴蜀書社・二〇〇九年。
- (5) 「贈任華」は、『全唐詩』に載せない。『唐詩紀事』卷二二「任華」に見

える。「邯鄲少年行」「贈任華」は、注(3)『校注』では、封丘県尉に就任する前の作品とする。

(6) 高適の自負の強さとその落差の現状による不遇感、懷才不遇については拙稿「高適の不遇感の諸相」(『山口女子大学文学部紀要』二、一九九三年)に論じた。

(7) 王助成『唐代銓選与文学』十頁(中華書局、二〇〇一年)の通常の科挙の礼部試前に挙子が麻衣を着ていたという旨の記述を参考にした。

(8) 「坐釣」は『全唐詩』では「萬物」に作る。今、『唐音統籤』(卷一三二)に従う。

(9) 文化芸術出版社、二〇〇一年。

(10) 『隋書』卷三三・經籍志二・史部には「四海耆舊傳一卷」「益部耆舊傳十四卷、陳長壽撰」「陳留耆舊傳二卷、漢議郎圈稱撰」「陳留耆舊傳一卷、魏散騎侍郎蘇林撰」「東萊耆舊傳一卷、王基撰」「襄陽耆舊記五卷、習鑿齒撰」「長沙耆舊傳三卷、晉臨川王郎中劉彧撰」などの各地の耆旧伝や先賢伝とともに逸士伝、高士伝、孝子伝などが見られる。郷拳里選、九品官人法と関わって各地においてこのような士人顕彰の伝が記録されたのであろう。

(11) 槻木正「博学宏詞科・書判拔萃科の実施について―「循資格」を手懸りとして―」一四三頁(『関西大学法学論集』三七一四、一九八七年)は「官途に身を置くあらゆる者にとって待選は必須であり、改官、或いは(初めての：川口補)任官に至るまでに相当の年月を要したのである。」とし、また一三四頁に「選数が少なく、待選期間が短い官職ほど、官資のランクは高く、その逆は官資のランクは卑かった。」とある。つまり前職がランクの低い薄官であるほど待選期間は長かったということである。しかしそれでも官職に就いた経歴を有するか否かでは、士人にとって決定的な隔たりが存在したと論者は考える。

(12) 林田慎之助『中国中世文学評論史』第六章・第二節「唐代古文運動の形成過程」(創文社、一九七九年)。

(13) 上海古籍出版社、一九九三年。

(14) 『唐詩紀事』卷二二・萬齊融に「梁肅作越州開元寺僧曇一碑銘云、師與賀賓客知章、李北海、褚諫議庭誨、涇縣令萬齊融爲儒釋之遊、莫逆之友。

李華爲潤州鶴林寺徑山大師碑銘云、菩薩戒弟子故吏部侍郎齊澣、故刑部尚書張均、故潤州刺史徐嶠、故涇陽縣令萬齊融、道流人望、莫盛于此。以二銘碑觀之、齊融蓋開元以來江南樂道之士也。于休烈傳云、與會稽賀朝、萬齊融、延陵包融、齊名。齊融止于崑山令、越州人也。」とある。文中の梁肅「越州開元寺律和尚塔碑銘并序」は『全唐文』卷五二〇、李華「潤州鶴林寺故徑山大師碑銘」は『同』卷三二〇、「于休烈傳」は『舊唐書』卷一四九。また万齊融は、『全唐文』卷三三五に文三篇、『全唐詩』卷一一七に詩四首を留める。また、『宋高僧傳』卷十四「唐越州法華山寺玄儼傳」「天寶十五載、歲次景申、萬齊融述頌德碑焉。」、岑仲勉「元和姓纂四校記」卷二・二十三問・奮「集古錄目玄儼律師碑、天寶十五載立、前祕書省正字萬齊融撰。」(中華書局、一九九四年)。後者に従えば、万は祕書省正字となつてエリートコースを歩み出したが、その後、官途に躓き県令で終わったのであろうか。

(15) 高明士「隋唐貢舉制度」第二章第五節「郷飲酒礼」(文津出版社、一九九九年)。

(16) 「前緩聲歌(一作後緩聲歌)」「義和織阿去嵯峨、觀物知命、使余轉欲悲歌、憂感人心胸。處山勿居峯、在行勿爲公。居峯大阻鏡、爲公遇讒蔽。雅琴自疏越、雅韻能揚揚。滑滑相混同、終始福祿豐」。遂欽立「先秦漢魏晉南北朝詩」『宋詩』卷四、中華書局、一九八三年。以下、同じ)。

(17) 『漢書』卷八・宣帝紀「元康元年春、以杜東原上爲初陵、更名杜縣爲杜陵。徙丞相、將軍、列侯、吏二千石、訾百萬者杜陵。」

(18) 『パノラマの帝国 中華唐代人生劇場』第一章「遊俠たちの社会史」(三省堂、一九九四年)。「生の過剰」の用語もこれによる。

(19) 『唐代先進地帯の莊園』八「在地莊家の見識と豪俠・尚氣」六二五頁(汲古書院、一九八六年)。

(20) 例えば、鐘元凱「唐詩的任俠精神」(『北京大學學報』一九八四―一四)。

(21) 岡田充博「劉又伝初探」(『中唐文學の視角』、創文社、一九九八年)。

(22) 妹尾達彦「唐代の科挙制度と長安の合格儀礼」(『律令制―中国朝鮮の法と国家』、汲古書院、一九八六年)のほかに、以下の論著の記述をまとめ、村上哲見「科挙の話」(一九八〇年、講談社現代新書)、傅璇琮「唐代科挙与文学」(陝西人民出版社、一九八六年)、小南一郎「元白文学集團の

- 小説創作」（『日本中国学会報』四七、一九九五年）、平田茂樹『科挙と官僚制』（山川出版社、一九九七年）、王助成『唐代銓選与文学』（中華書局、二〇〇一年）。
- (23) 大室幹雄『檻獄都市』三三三頁（三省堂、一九九四年）。
- (24) この二句の解釈は、相山女学園大学の二宮俊博教授のご教示による。
- (25) 前掲の傅璇琮「李頎考」、譚優学「李頎行年考」、劉宝和『李頎詩評注』、陳貽焮主編『增訂注釈全唐詩』。
- (26) 嚴耕望「唐人習業山林寺院之風尚」（『嚴耕望史学論文選集』、聯經出版事業公司、一九九一年）。
- (27) 岑参の歌行は、これに類似する詩題と歌辞の構成であることが目立つ。
「白雪歌送武判官歸京」「熱海行送崔侍御還京」「輪臺歌奉送封大夫出師西征」「敷水歌送竇漸入京」「梁園歌送河南王說判官」「函谷關歌送劉評事使關西」「胡笳歌送顏真卿使赴河隴」（卷一九九）。

（中国文学）